

# 平成17年度病虫害発生予報第6号

平成17年8月4日  
鳥取県病虫害防除所

## 予報の概要 [ 参考 ]

区 分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病(穂いもち)	やや早い	少ない
		紋枯病	-	多い
		白葉枯病	-	少ない
		二カメイガ	やや早い	平年並
		セジロウンカ	-	やや多い
		トビイロウンカ	-	平年並
		斑点米カメムシ類	-	多い
	コブノメイガ	平年並	平年並	
	ダイズ	紫斑病	やや早い	平年並
		ハスモンヨトウ	やや早い	やや多い
カメムシ類		やや早い	やや多い	
果 樹	ナシ	黒斑病	-	平年並 (一部やや多い)
		ハダニ類	-	平年並
		シンクイムシ類	平年並	平年並~やや多い
	カキ	果実吸ガ類(ヤガ)	平年並	平年並
		うどんこ病	平年並	やや多い
	リンゴ	炭疽病	平年並	平年並
		カキノヘタムシガ	平年並	(一部やや多い)
		斑点落葉病	平年並	平年並
果樹共通	ハダニ類	平年並	やや多い	
野 菜	ネギ	カメムシ類	-	やや少ない
		軟腐病	平年並	やや多い
		白絹病	平年並	やや多い
		黒斑病	平年並	やや少ない
		ネギハモグリバエ	平年並	平年並
		ネギアザミウマ	平年並	平年並
	ナガイモ	シロイチモジヨトウ	平年並	平年並
		炭疽病	平年並	平年並
		ヤマノイモコガ	平年並	平年並
	シバ	ハダニ類	平年並	平年並
		シロイチモジヨトウ	平年並	平年並
		スジキリヨトウ	平年並	平年並
	キャベツ ブロッコリー	シバツトガ	平年並	平年並
		ハスモンヨトウ	平年並	やや多い
		ハイマダラノメイガ (ダイコンシンクイムシ)	平年並	平年並

## 気象予報 (抜粋)

1か月予報(7月30日~8月29日:7月29日、広島地方气象台発表)  
向こう1か月の気温は平年並か高いでしょう。降水量と日照時間は平年並の見込みです。

< 可能性の大きな気温経過 >

期 間	平均気温
7月30日 ~ 8月5日	平年並
8月6日 ~ 12日	高 い
8月13日 ~ 26日	平年並

## 普通作物

### 【イネ】

#### 1 いもち病（穂いもち）

##### （1）予報の内容

発生地域 県下全域  
発生時期 やや早い  
発生量 少ない

##### （2）予報の根拠

ア 本年のイネの出穂期は平年よりやや早くなっている。

イ 7月下旬現在、葉いもちの発生ほ場率は11.2%（平年：41.3%）で、少ない発生となっている。

ウ 7月下旬現在、梅雨明け以降の好天により、全般に病斑の進展は緩慢となっている。

エ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、本病の発生を助長しない。

##### （3）防除上注意すべき事項

ア イネの生育時期に応じた適期予防防除を基本とし、粉剤又は液剤を使用する場合は、穂ばらみ期の防除を必須とする。粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して水面施用する。

なお、葉いもちの発生が多い場合、穂揃い期の追加防除を行う。

イ 葉いもちの発生に注意し、ほ場をよく観察して早期発見に努め、上位葉に急性型病斑がみられるようであれば、直ちにカスラブサイド粉剤3DL（同水和剤）、ブラシン粉剤DL（同水和剤）等で防除を行う。

#### 2 紋枯病

##### （1）予報の内容

発生地域 県下全域  
発生量 多い

##### （2）予報の根拠

ア 8月2日現在、発生ほ場率は65.6%（平年：34.6%）と平年に比較して極めて広範囲に発生がみられている。

イ 8月1日現在、県予察ほ場における病斑高率は、33.0%（平年：26.5%）と平年に比較して高い。

ウ 本年のイネの生育は茎数が多く、本病の発生に好適な状況となっている。

エ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、発生に好適である。

##### （3）防除上注意すべき事項

病虫害発生予察注意報第1号（平成17年7月28日付）を参照のこと。

#### 3 白葉枯病

##### （1）予報の内容

発生地域 常習発生地  
発生量 少ない

##### （2）予報の根拠

7月下旬現在、本病の発生はほとんどみられない。

(3) 防除上注意すべき事項

浸冠水、台風等により病勢の進展が予想される場合は、シラハゲン粉剤Sを散布する。

4 ニカメイガ(第2世代)

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域  
発生時期 やや早い  
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、予察灯、フェロモントラップにおける誘殺数は平年並である。

イ 7月下旬現在、現地ほ場における発生は平年並である。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並と予想されており、本虫の発生をやや助長する。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 現在、本種を対象とした防除は必要ないが、8月上旬に心枯茎率1%以上又は被害株率10%以上の場合、8月中旬(幼虫の発生最盛期)に防除を行う。

イ 近年、局地的に多発生ほ場が散見されているのでほ場の発生動向に注意する。

5 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域(特に沿岸部)  
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、予察灯の誘殺数は平年よりやや多い。

イ 7月下旬現在、発生ほ場率は93.2%(平年:65.4%)、一株当たりの平均成幼虫数は2.8頭(平年1.7頭)で平年よりやや多い発生となっている。沿岸部を中心に、一株当たり成幼虫数が10頭を超えるほ場も散見されている。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並と予想されており、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

8月上旬に一株当たり成幼虫数が10頭以上みられる場合、防除指針等に従い粉剤等で防除を行う。

6 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域(特に沿岸部)  
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

7月下旬現在、県下全域で予察灯への誘殺が確認されている。また、一部ほ場においても発生が確認されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 現在、本虫を対象とした防除は必要ないが、発生の特徴としてほ場間差が大きい  
ため、ほ場ごとの生息密度及び発生予察情報に注意する。

イ 防除の目安は、8月中旬で1株当たり1頭以上とする。

## 7 斑点米カメムシ類

### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生量 多い

### (2) 予報の根拠

ア 水田周辺のイネ科雑草地では、アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソミドリカスミカメ類、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシなどが発生している。

7月中旬現在、捕虫網5往復10回振りすくい取りによる平均成幼虫数は、154.2頭(平年:139.6頭)で平年よりやや多い発生となっている。

イ 7月下旬現在、すでに穂揃い期を迎えた水田における捕虫網25往復50回振りすくい取りによる平均成幼虫数は27.9頭で多い発生となっている。また、要防除水準(4頭以上)を超える水田は70%と多数となっている。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高いと予想されており、本虫の増殖およびイネへの加害活動に好適な条件となっている。

### (3) 防除上注意すべき事項

病害虫発生予察注意報第2号(平成17年8月1日付)参照のこと

## 8 コブノメイガ

### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生時期 平年並

発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地ほ場での発生は平年並である。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

### (3) 防除上注意すべき事項

現在、本虫を対象とした防除は必要ないが、発生が多いほ場では、被害発生初期(8月中旬頃)に、防除指針に従って粉剤又は粒剤を散布する。

## 【ダイズ】

### 1 紫斑病

#### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生時期 やや早い

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 大豆の開花期は平年より2~3日程度早くなっている。

イ 本病の莢への感染に好適な時期にあたる8月の降水量は、平年並と予想されている。

#### (3) 防除上注意すべき事項

防除には開花期の25~30日後に水和剤または粉剤を用いる。水和剤を用いる場合は、アミスター20フロアブルに展着剤を加用し、150~300g/10aを1回散布する。なお、カメムシ類の防除時期でもあり、水和剤を用いた同時防除が可能である。粉剤を用いる場合は、マネージトレボン粉剤を1回散布する。

## 2 ハスモンヨトウ

### (1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	やや早い
発生量	やや多い

### (2) 予報の根拠

- ア フェロモントラップへの誘殺数は平年よりやや多く、7月下旬以降、再び増加している。
- イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、本虫の発生をやや助長する。

### (3) 防除上注意すべき事項

- ア 若齢幼虫は集団で葉裏の葉肉を食害するために表皮が残り白変葉となる、白変葉の発生か所を中心に、捕殺（葉ごとの切除）を行うか、粉剤等のスポット散布を行う。
- イ 幼虫が老齢になると薬剤の効果が劣るため、早期発見と早期防除に努める。

## 3 カメムシ類

### (1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	やや早い
発生量	やや多い

### (2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、予察灯の誘殺数は平年である。
- イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、本虫の発生をやや助長する。

### (3) 防除上注意すべき事項

- 防除指針に従い、若莢期にあたる開花期の25～30日後と、その10日後に薬剤防除を行う。

## 果 樹

### [ナ シ]

#### 1 黒斑病

##### (1) 予報の内容

発生量	平年並（一部：やや多い）
-----	--------------

##### (2) 予報の根拠

- ア 7月21日に巡回調査した果実の破袋調査の結果によると、県内の平均発病率は5.8%（平年5.5%）であり、ほぼ平年並であったが、一部で被袋果実の発病率が20%を越える多発園が認められた。また、徒長枝葉の平均発病率は2.3%（平年4.6%）であり、平年をやや下回った。
- イ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並と予想されている。

##### (3) 防除上注意すべき事項

- ア 徒長枝葉及び収穫果実の発病を防ぐため、収穫前の薬剤散布を徹底する。
- イ 薬剤は、8月上旬にアリエッティC水和剤800倍液、8月中～下旬にストロピードライフフロアブル3,000倍液を散布する。

## 2 ハダニ類（カンザワハダニ，クワオオハダニ，ナミハダニ）

### （1）予報の内容

発生量 平年並

### （2）予報の根拠

ア 7月中旬に行った巡回調査の結果、カンザワハダニの平均寄生葉率は4.5%（平年：6.5%）、1葉当たりの寄生虫数は0.2頭（平年：0.2頭）、クワオオハダニは8.2%（平年：12.0%）、1葉当たりの寄生虫数は0.3頭（平年：1.3頭）と平年並～やや少ない発生となっている。

イ 7月下旬現在、県予察ほ場におけるカンザワハダニの1葉当たりの寄生虫数は0頭（平年：0.2頭）と少ない発生となっている。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並と予想されており、ハダニ類の増殖にやや好適である。

### （3）防除上注意すべき事項

ア 発生が多い園では、散布量を増やし、枝を洗うように丁寧に薬剤散布する。

イ ハダニ類は、種類によって薬剤効果が異なるので、種類を十分に見極める。また、薬剤の散布にあたっては、連用を避けて、輪番散布する。

ウ カンザワハダニ、ナミハダニにはコロマイト乳剤1,500倍液、カネマイトフロアブル1,500倍液、マイトコーネフロアブル1,500倍液などを、クワオオハダニには前述の剤に加えて、ダニトロンフロアブル1,500倍液などを使用する。なお、薬剤の散布にあたっては、収穫期が近づいているため、農薬の使用基準を遵守する。

## 3 シンクイムシ類

### （1）予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並～やや多い

### （2）予報の根拠

ア 7月下旬現在、フェロモントラップにおけるナシヒメシンクイの誘殺数はやや多く、モモシンクイガの誘殺数はほぼ平年並である。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高いと予想されており、ナシヒメシンクイの第3回成虫の発生最盛期は平年並の7月下旬頃、モモシンクイガ第2回成虫の発生最盛期は平年並の8月中旬頃と見込まれる。

### （3）防除上注意すべき事項

ア 豊水の無袋栽培園では8月中旬および下旬に、10日間隔でDDVP乳剤50の1,000倍液などを散布する。なお、薬剤の散布にあたっては、収穫期が近づいているため、農薬の使用基準を遵守する。

イ 受粉樹に残っている果実はシンクイムシ類の発生源となるので早めに除去する。

## 4 果実吸蛾類

### （1）予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

### （2）予報の根拠

ア 7月下旬現在、防蛾灯無設置園での果実被害はほとんど認められていない。

イ ナシの生育はほぼ平年並である。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高いと予想されており、成虫の加害活動にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 豊水の無袋栽培では黄色蛍光灯の点灯を8月から始める。点灯する時間は、日の入り30分後から日の出30分前とし、2週間おきに点灯及び消灯時刻を変更する。
- イ 網掛けを行っている果樹園では、風などによる網の破れに注意する。

[カキ]

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 近年、本病が多発傾向にあり、越冬菌密度が高いことが見込まれる。
- イ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

- 8月上旬にストロビードライフフロアブル3,000倍液、8月下旬にスコア水和剤10の3,000倍液を散布する。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並(一部:やや多い)

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地のカキ園(富有)での発病は、ほぼ平年並となっている。
- イ 昨年の多発園では、枝病斑の形成量などが多く、越冬菌密度が高いことが見込まれる。
- ウ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 8月上旬にストロビードライフフロアブル3,000倍液、8月下旬にスコア水和剤10の3,000倍液を散布する。
- イ 現在、発病の認められている新梢及び果実は見つけ次第取り除く。

3 カキノヘタムシガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 県予察ほ場の予察灯における7月のカキノヘタムシガ総誘殺数は12頭(平年:11.8頭)と平年並である。
- イ 第2回成虫の発生最盛期は平年並の7月第6半旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- 8月初旬にスミチオン水和剤40の1,200倍液などを散布する。多発園では8月中旬にアグロスリン水和剤2,000倍液などを追加散布する。

## [ リンゴ ]

### 1 斑点落葉病

#### ( 1 ) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 やや多い

#### ( 2 ) 予報の根拠

ア 近年、本病が多発傾向にあり、越冬菌密度が高いことが見込まれる。

イ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並と予想されている。

#### ( 3 ) 防除上注意すべき事項

薬剤は8月上旬（早生種収穫前）にアリエッティC水和剤800倍液を、8月下旬（早生種収穫後）にオキシラン水和剤800倍液を散布する。

### 2 ハダニ類

#### ( 1 ) 予報の内容

発生量 平 年 並

#### ( 1 ) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場ではやや少ない発生となっている。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、ハダニ類の増殖にやや好適である。

#### ( 3 ) 防除上注意すべき事項

発生が認められた場合は、ただちにコロマイト乳剤1,500倍液などを散布する。

## [ 共通（ナシ、カキ、リンゴ） ]

### 1 カメムシ類

#### ( 1 ) 予報の内容

発生量 やや少ない

#### ( 2 ) 予報の根拠

ア 7月下旬に行ったナシ園における巡回調査の結果、平均被害果率は0.3%（平年：1.7%）であり、平年と比較して被害は少なかった。

イ 7月の予察灯におけるチャバネアオカメムシ総誘殺数は、八頭町で20頭（平年：652.2頭）、河原町で19頭（平年：816.8頭）、湯梨浜町で2頭（平年：151.4頭）、大栄町で43頭（平年：229.3頭）と少なかった。

ウ 7月の集合フェロモントラップにおけるチャバネアオカメムシ総誘殺数は少なかった。

エ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高いと予想されており、カメムシ類の加害活動にやや好適である。

#### ( 2 ) 防除上注意すべき事項

ア 例年、第1世代成虫が発生する7月下旬以降は果樹園への飛来量が増加するので、定期的にはほ場を見回り、カメムシ類の飛来に注意する。特に、例年被害がみられる山際の園では観察を怠らないようにする。

イ 薬剤は樹種ごとの防除暦を参考とする。

ウ 樹種によっては収穫間近となっているので、農薬の使用基準を遵守する。

エ カメムシ類の餌となるスギ、ヒノキの球果量が多いと見込まれることから、第2世代成虫が発生する8月下旬以降は、果樹園への飛来量が増加する場合もあるので注意する。



# 野 菜

## [ネギ]

### 1 軟腐病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 やや多い

#### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在の発生量は平年並である。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、やや多い発生量が見込まれる。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア ネギが傷つくような無理な土寄せおよび追肥を行うと、発病が助長されるので避ける。

イ 収穫1～2か月前の土寄せ時の直前、または8月上旬の白絹病防除時にオリゼメート粒剤10a当たり6kgを株元散布する。

ウ 最終土寄せ前にナレート水和剤1,000倍液を散布する。土寄せ後にコサイドDF1,000倍液またはZボルドー500倍液を7～10日間隔で2～3回散布する。

### 2 白絹病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 やや多い

#### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在の発生量は平年並である。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、やや多い発生量が見込まれる。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 8月下旬までに最終土寄せをする作型では、最終土寄せ前にリゾレックス粉剤10a当たり20kgを畦の両側から株元に散布する。

イ 最終土寄せが9月以降の作型では、8月上旬にモンカット粒剤を10a当たり4kgを株上から株元散布する。10月以降収穫予定のネギではフロンスайд粉剤10a当たり15kgを畝の両側から株元に散布する。

ウ 8月中旬以降に発病がみられる場合は、モンカットフロアブル40の2,000倍液を株元を主に散布する。軟腐病との同時防除により両病害に対して効果が安定する。

### 3 黒斑病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 やや少ない

#### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在の発生量はやや少ない。

イ 本病は気温が25前後で、降雨が多い場合に多発する。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、引き続きやや少ない発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 根傷み、肥料不足となると発病しやすいので、肥培管理に注意する。  
イ 薬剤は、ダコニール1000の1,000倍液、ポリベリン水和剤1,500倍液などを予防散布する。発病後は、ロブラール水和剤1,000倍液などを散布する。

4 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在の発生量は、平年並である。  
イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、今後も平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、アグロスリン乳剤2,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤2,000倍液、ダントツ水溶剤2,000倍液などを散布する。

5 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在の発生量は、平年並である。  
イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、今後も平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤は、アグロスリン乳剤2,000倍液、ランネート45DF1,000倍液、モスピラン水溶剤2,000倍液、アドマイヤーフロアブル2,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤2,000倍液、及びマラバッサ乳剤1,000倍液などを7~10日間隔で薬剤を替えて散布する。

特に多発傾向にあるほ場では、ダントツ水溶剤2,000倍液、オンコルマイクロカプセル1,000倍液(またはガゼットMCフロアブル1,000倍液)などを散布し密度低下を図り、その後上記薬剤で防除する。

イ 同一、同系統の薬剤を連用すると効果が低下する恐れがあるので、ローテーション散布に努める。

6 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、県予察ほ場におけるフェロモントラップ誘殺数はやや少ない。  
イ 現地調査ほ場における発生は見られなかった。  
ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、今後、平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 8月上旬現在、幼虫の発生がみられるほ場では、早急に防除を行う。
- イ 次世代の幼虫の発生時期は9月上中旬と予想される。幼虫が筒状の葉身に食入した後では防除効果が低下するので、発蛾最盛期に防除を行う。
- ウ 防除適期は若齢幼虫の時であり、この時期を逃すと極めて防除困難となる。防除薬剤は、8月上旬には、アフーム乳剤2,000倍液、ランネート45DF1,000倍液などを散布する。8月下旬にはアフーム乳剤2,000倍液、ランネート45DF1,000倍液、コテツフロアブル2,000倍液、マッチ乳剤2,000倍液、アタブロン乳剤2,000倍液などを用いて、5~7日間隔で2回防除を行う。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在の発生量は平年並である。
- イ 本病は降雨によって発病が増加する。
- ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並と予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。
- イ 8月は、ダコニール1000の1,000倍液、ジマンダイセン水和剤600倍液などを7~10日間隔で散布する。
- ウ 茎葉が繁茂して薬液がかかりにくい状態なので、丁寧に薬剤を散布する。

2 ヤマノイモコガ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア フェロモントラップにおける成虫の誘殺数は平年並である。
- イ 7月下旬現在の幼虫の発生量はやや少ない。
- ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並と予想されており、今後も平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本害虫は、高温乾燥条件及び、風通しの悪いほ場で被害が増加するので、早期発見に努める。
- イ アタブロン乳剤2,000倍液(経過措置承認薬剤)、トレボン乳剤1,000倍などを7~10日間隔で2回程度散布する。薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。

### 3 ハダニ類

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在の発生量は、全体的にはやや少ないが、局地的に発生量のやや多いほ場が見受けられる。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、今後も平年並の発生が見込まれる。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 高温乾燥条件で発生が増加する。薬剤防除は、茎葉が繁茂して薬液がかかりにくいので、散布量を多めにして丁寧に散布する。

イ 防除薬剤は、コテツフロアブル2, 000倍液(経過措置承認薬剤)、ニッソランV乳剤1, 000倍液、コロマイト乳剤1, 000倍液などを使用する。

### 4 シロイチモジヨトウ

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場におけるフェロモントラップ誘殺数はやや少ない。

イ 現地調査ほ場における発生は見られなかった。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、今後、平年並の発生が見込まれる。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 8月上旬現在、幼虫の発生がみられるほ場では、早急に防除を行う。

イ 次世代の加害幼虫の発生時期は9月上中旬と予想され、8月下旬を重点に防除を行う。

ウ 防除適期は若齢幼虫の時であり、この時期を逃すと防除困難となる。防除薬剤は、8月上旬にはコテツフロアブル2, 000倍液(経過措置承認薬剤)、8月下旬には、デルフィン顆粒水和剤1, 000倍液などを用いて、5~7日間隔で2回程度防除を行う。

## [シバ]

### 1 スジキリヨトウ

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア フェロモントラップによる成虫の誘殺数はやや少ない。

イ 現地調査ほ場において、若齢幼虫による白化葉はみられていない。

ウ 7月下旬現在、生産シバにおける卵塊数はやや少ない。

エ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、今後、平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 卵のふ化直後の8月上～中旬に、ダイアジノン粒剤5の10a当たり6kg又はオルトラン粒剤10a当たり10kgを散布する。
- イ その後も幼虫の発生がみられる場合は、ダイアジノン乳剤40又はカルホス乳剤の1,000倍液などを散布する。

2 シバツトガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア フェロモントラップによる成虫の誘殺数は平年並である。
- イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並と予想されており、今後、平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 成虫の発生ピークは、平年並の7月下旬～8月上旬であると考えられる。
- イ 8月上～中旬に、ダイアジノン粒剤5の10a当たり6kg又はオルトラン粒剤10a当たり10kgを散布する。
- ウ その後も幼虫による被害がみられる場合は、ダイアジノン乳剤40又はカルホス乳剤の1,000倍液などを散布する。

【キャベツ、ブロッコリー】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、県予察ほ場におけるフェロモントラップ誘殺数は、平年並となっている。
- イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並と予想されており、今後、やや多い発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 夏期の高温乾燥条件で多発しやすい。また、中齢幼虫以降は薬剤が効きにくくなるので、若齢幼虫期の防除を徹底する。
- イ キャベツの防除薬剤は、ラービン水和剤75の1,000倍液、アタプロン乳剤2,000倍液、コテツフロアブル2,000倍液などを散布する。
- ウ ブロッコリーの防除薬剤は、PAP乳剤(エルサン、パプチオン)の1,000倍液などを散布する。

2 ハイマダラノメイガ(ダイコンシンクイムシ)

(1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、幼虫による被害はほとんどみられていない。
- イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並と予想されており、今後、平年並の発生が見込まれる。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

- ア 本虫は高温少雨、残暑の厳しい年に多発生し、内部の未展開葉や成長点部が食害されるので注意する。
- イ 特に、は種直後から定植直後までの被害が大きいため、発生ほ場では防除を徹底する。
- ウ 育苗施設では、防虫寒冷紗被覆（網目 1.5 mm以下が好ましい）を実施し、害虫の侵入を防ぐ。
- エ キャベツの防除薬剤は、スピノエース顆粒水和剤 5,000 倍液、アフーム乳剤 2,000 倍液、ハチハチ乳剤 1,000 倍液～2,000 倍液、トルネードフロアブル 2,000 倍液などを散布する。
- オ ブロコリーの防除薬剤は、PAP 乳剤（エルサン、パプチオン）の 1,000 倍液などを散布する。

**[おしらせ]**

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。詳しい内容は、独立行政法人 農薬検査所の「農薬登録情報検索システム」から検索できます。（<http://www.acis.go.jp/>）

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守しましょう。**

**< 鳥取県病虫害防除所ホームページ >**

**アドレス** <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病虫害の発生予察情報、現地巡回調査結果などの指導情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病虫害防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647

E-mail : byogaichu@pref.tottori.jp 又は kttr0301@sp.jppn.ne.jp

次回の予報発表は、8月25日（木）の予定です。